熊本大学教育実践研究　40号，83－90，2023

不登校支援活動における教員養成系大学生の学びと課題
―「ユア・フレンド」学生へのアンケート調査から―

黒山竜太*・藤中隆久*・干川　隆*

Outcomes and tasks for university students who study in a teacher training course in support activities for school refusal children
—Based on a questionnaire survey of 'Your Friend' students—

Ryuta KUROYAMA, Takahisa FUJINAKA and Takashi HOSHIKAWA

(Received October 27, 2022)

Abstract

The number of school refusal students in Japanese elementary and junior high schools is increasing year by year, and there is a strong demand for psychological support for children. Since 2002, the Faculty of Education at Kumamoto University has been working with the Kumamoto City Board of Education on the "Your Friend Project" to send undergraduate students to school refusal students. The usefulness of this project has already been shown, but in this study, we conducted a questionnaire survey of participating students for the purpose of confirming its significance. As a result, it was shown that while many students realized the significance of the activities, they were more worried as the grade progressed. In addition, it was shown that this activity has great significance for students as an activity to get close to children before becoming a teacher. However, it was also suggested that teachers and guardians do not understand that the purpose is not to return to school, and there is a reality that they fall into a dilemma. With the number of school refusal students increasing year by year, it was thought that it would be necessary to seriously face the way the school education system itself should be.

Key words: Your Friend Project, Schoo refusal students, Cooperations for children

1．問題と目的

令和2年度における文部科学省による調査結果（2021）によれば，全国の小中学校における不登校児童生徒数は196,127人であり，前年度から14,855人（8.5%）増加した．また，不登校児童生徒数は直近8年間連続して増加しており，そのうち約55%の不登校児童生徒が90日以上欠席している．日本における不登校児童生徒数は近年増加の一途をたどっているが，その要因についてはさまざまな検討がなされている（例えば但田（2019）；屋良・淡野（2019）など）．不登校児童生徒に対して援助専門家による支援が必要であることは言うまでもないが，その要因の多様化や規模の大きさへの対応を踏まえると，専門家による支援には限りがあり，行き届いた支援が行われていないのが現状であろう．一方，専門家よりも不登校児童生徒にとってより身近な存在によるサポートが彼らにとって心強い場合も多い．そうしたことを踏まえながら，より地域のリソースを活用した支援が必要であると考えられる．何よりも，不登校状態に陥った子どもたちが社会から隔絶され孤立してしまうことに対して，何らかの支援を強化していくことが求められていると言える．

こうした事態に対し，熊本大学教育学部では，2002年度より熊本市教育委員会との連携事業として「ユア・フレンド事業」を実施している．「ユア・フレンド事業」とは，熊本市教育委員会の要請に熊本大学教育学部が応じ，不登校状態にある小中学校

＊ 熊本大学大学院教育学研究科

の児童生徒に対して大学生ボランティアを募集・派遣して，子どもたちの話し相手・遊び相手になる活動である．教育学部2年生以上の学生が，臨床心理学を専門とする教員による事前研修を経てユア・フレンドに登録し，熊本市教育委員会教育相談室スタッフによるマッチングを経て，随時児童生徒の元へ派遣されている（図1参照）．事業開始2年目から登録学生数は毎年度100名を超え，2022年度は約170名の学生が登録している．新型コロナウィルス感染症拡大後，その防止のため，やむを得ずそれまで行ってきた当該児童生徒の家庭への派遣は一旦中断している状態であるが，児童生徒の在籍する学校の一室を利用した活動や適応指導教室への派遣，またオンラインでの活動を実施している．

学生の事業への参加は任意であり，年に2回全体研修を実施し，活動の意義を再確認するとともに，ユア・フレンド同士の情報交換の場を設けている．また，本事業は平成19年度より一定の条件を満たした学生に対して単位を付与している（図2参照）．しかし，多くの学生たちは単位認定を希望しておら

図1　ユア・フレンド活動の概要

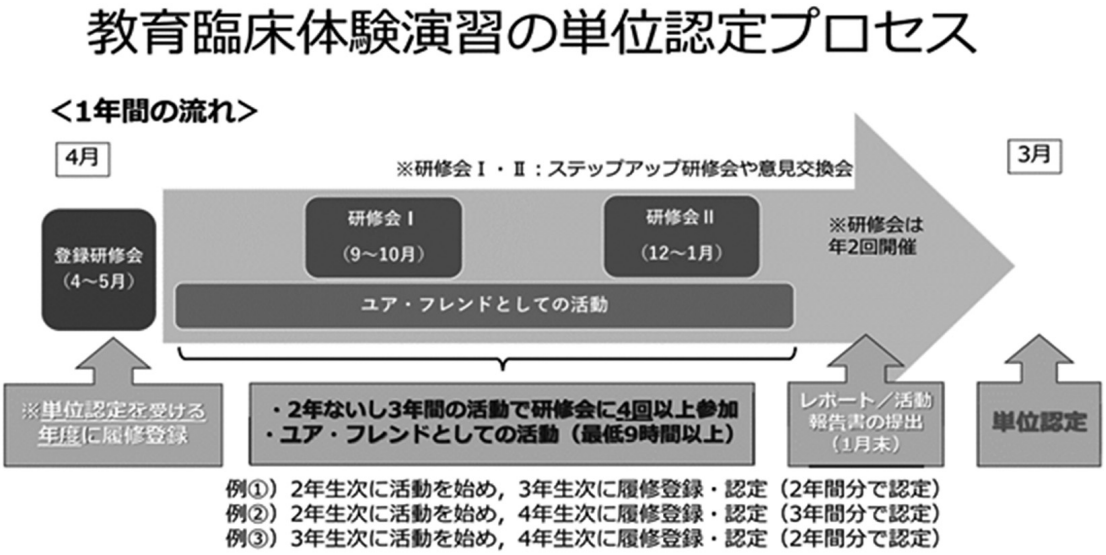

図２　ユア・フレンド活動の単位認定プロセス

ず，純粋に事業の趣旨に賛同して参加している．そこには，教員を目指す学生たちにとって，自分たちが教員となった際に不登校の児童生徒を担当することになる可能性は高く，当該児童生徒にどのように寄り添うことができるかについて学生のうちから体験的に学ぶことを志向していたり，そもそも不登校状態に陥る子どもたちと接する機会がないことへの問題意識に依るところもあるようである．

本事業については，これまでに藤中（2004），辻野ら（2004），杉原（2016）などがこの事業について報告や考察を行っており，この事業の有効性や児童生徒の心の居場所を作ることなどの意義を示している．藤中（2004）は，心理臨床の専門家でないボランティア学生がこの活動に従事していることの心理臨床学的意義を唱えた．また辻野ら（2004）は，ユア・フレンドを利用する学校や学生への詳細な調査から，その有効性と課題について明らかにした．さらに杉原（2016）は，教育行政からみた不登校対策の視点も踏まえたうえで，本事業の充実化のために学校現場との連携が不可欠であること，またそのために大学と教育委員会の連携や工夫が求められることを示している．

ところで，この事業の趣旨は，児童生徒の「学校への復帰を目指していない」点にその特徴がある．あくまでユア・フレンドは子どもたちへそっと寄り添い続けることを重視している．しかし，現状として学校復帰を目指したい学校や保護者の思いとの間でジレンマを感じる学生も散見される．また，支援にあたる学生は心理臨床家としてのオリエンテーションを受けているわけではなく，あくまでボランティアであること，また将来教師となることを志向しているからこそ，「学校への復帰を目指さない」活動に少なからず不安や戸惑いを覚えるものも多い．そうしたなかで，今後本事業をより充実したものにしていくために，学生たちがどのような学びを得，一方で課題を抱えているかを継続的に確認していくことが必要である．

本事業は，2021年度で20周年を迎えた．その節目として，筆者らは改めて事業に協力している学生へのアンケート調査を実施した．本研究ではその結果を紹介し，ユア・フレンド活動による学びの意義及び課題について明らかにすることを目的とする．

２．方　法

対象：2021年度ユア・フレンド活動に従事した大学生・大学院生計129名．

手続き：2022/1/20～2022/2/18の期間に，登録学生へweb 入力形式（Google フォームを使用）を用いて回答を依頼した．

質問内容：質問①【活動は楽しい（楽しかった）】，質問②【活動は学びになる（学びになった）】，質問③【活動に対して悩んでいる（悩んだ）】，質問④【活動は大変だ（大変だった）】，質問⑤【活動に参加してよかった】の各項目について，非常にそう思う（６点）～全くそう思わない（１点）までの６段階評定で回答を求めた．

また，質問⑥【学びになったと思うこと】，質問⑦【課題（改善した方がよい）と思うこと】，質問⑧【今後参加する学生に伝えたいこと】については，自由記述にて回答を依頼

した.

倫理的配慮：調査にあたり，回答が成績等に影響することはないこと，集計した形で学外を含め公表すること，回答したことにより同意を得たとみなすことについて説明した.

3．結　果

回答者総数は合計63名（男性９名，女性54名，回答率48.9%）であった（表１参照）．また，学年・性別ごとの平均値は表２の通りであった.

質問項目①～⑤の評定値について，質問項目間の相関係数を算出した（表３参照）．その結果，質問①と質問②及び質問⑤の間に有意な正の相関（それぞれ.539，.588，いずれも $p<.01$），また質問②と質問⑤の間（.562，$p<.01$），質問③と質問④の間（.320，$p<.05$）に有意な正の相関が確認された.

次に，質問項目①～⑤の６段階評定について学年×性別の２要因分散分析を行ったところ，質問③【活動をしていて悩んでいる（悩んだ）】の項目において学年の主効果が有意（F（2,56）=3.98，$p<.05$）であり，２年生と３・４年生の間に有意差が示され（$p<.05$），上位学年でより悩む傾向にあったことが示された.

また，質問④【活動は大変だ（大変だった）】の項目において学年の主効果が有意傾向にあった（$p<.10$）．その他の項目について有意差は示されなかった.

次に，質問⑥～⑧の自由記述について，KH-Coder を用いて計量テキスト分析を実施し，共起ネットワークを作成した.

質問⑥【学びになったこと】では，６つの Subgraph が生成された．第１Subgraph には「学ぶ」「活動」「自分」「大切」「心」「開く」「姿勢」といった単語が抽出され，活動を通して児童生徒とつながること，心を開くための姿勢の大切さが学びになっていることが窺えた．また第２Subgraph には「学校」「現場」「機会」「関わり」「勉強・学べる」といった単語が抽出され，教職を目指す大学生であるユア・フレンドが学校現場を直接知る有益な機会となっていることが窺えた．第３Subgraph には「先生」「養護」「実際」「知る」「様々」「違う」といった単語が抽出され，特に養護教諭の現場での実際の子どもの実態に応じた多様な対応に触れることができていることが窺えた．第４Subgraph には「子・子ども」「不登校」「関わる」「考える」といった単語が抽出され，不登校の子どもと関わるにあたり学生たちにとって考えさせられることが多かったことが推測さ

表１　アンケート回答者属性

学年	女性	男性	計
2年生	15	2	17
3年生	18	3	21
4年生	21	3	24
大学院生	0	1	1
計	54	9	63

表２　回答の平均値

	質問①		質問②		質問③		質問④		質問⑤	
学年	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
2年生	5.33(0.70)	5.00(0.00)	5.80(0.54)	6.00(0.00)	3.60(1.20)	3.00(1.00)	3.00(1.10)	2.50(0.50)	5.47(0.72)	6.00(0.00)
3年生	5.39(0.76)	5.00(0.82)	5.78(0.42)	5.30(0.94)	3.67(1.49)	4.33(0.94)	3.44(1.01)	3.33(0.47)	5.94(0.23)	5.67(0.47)
4年生	5.14(0.94)	5.67(0.47)	5.52(0.50)	6.00(0.00)	4.24(1.02)	5.67(0.47)	3.33(0.84)	4.33(1.25)	5.62(0.72)	6.00(0.00)
大学院生	-	5.00(0.00)	-	5.00(0.00)	-	3.00(0.00)	-	3.00(0.00)	-	6.00(0.00)

※（）内は標準偏差

表３　質問項目間の相関関係

	質問①	質問②	質問③	質問④	質問⑤
①活動は楽しい（楽しかった）	-	.539**	-0.106	-0.062	.588**
②活動は学びになる（学びになった）		-	-0.122	0.091	.562**
③活動に対して悩んでいる（悩んだ）			-	.320*	0.017
④活動は大変だ（大変だった）				-	0.116
⑤活動に参加してよかった					-

*$p<.05$，**$p<.01$

れた．第5 Subgraphには「児童・生徒」「強い」「感じる」といった単語が抽出され，児童生徒と関わることの大切さを強く感じたことが窺えた．第6 Subgraphには「話す」「楽しい」「経験」といった単語が抽出され，子どもたちとの関わり自体が楽しい体験になっていることが窺えた（図3参照）．

質問⑦【活動の課題】では，7つのSubgraphが生成された．第1 Subgraphには「Zoom」「iPad」「会話」「行う」「多い」などの単語が抽出され，コロナ禍でオンラインによる活動の推進を探る必要性が示された．第2 Subgraphには「判断」「感染」「状況」「全体」といった単語が抽出され，コロナ禍での活動に対して安心できない状況があったことが窺えた．また第3，4，5 Subgraphには「活動」「ユア・フレンド」「学校」「先生」「連携」「内容」「感じる」「登校」「勉強」といった単語が抽出され，学校に活動の趣旨を必ずしも理解してもらえておらず，連携の必要性が述べられていることが窺えた．第6 Subgraphには「道具」「異なる」といった単語が抽出され，学校ごとに使える遊び道具が違うことへの戸惑いが示された．第7 Subgraphには「保護者」「依頼」「求める」「参加」「相談」「理解」といった単語が抽出され，保護者からの依頼や相談・要求に対して戸惑う学生の姿も垣間見られた（図4参照）．

質問⑧【今後参加する学生に伝えたいこと】では，7つのSubgraphが生成された．第1 Subgraphには「不登校」「変わる」「児童」「関わる」「講義」「勉強」「学生」「実習」といった単語が抽出され，学校現場で子どもの実態に触れることが何より学びになることが示唆された．第2 Subgraphには「ユア・フレンド」「楽しい」「学び」「過ごす」「時間」「貴重」などの単語が抽出され，活動の楽しさ，またユア・フレンドとして過ごせる時間が貴重であるといった声が窺えた．第3 Subgraphには「人」「繋がる」「笑顔」「心」「開く」「楽しむ」「目・前」「子」といった単語が抽出され，目の前の子どもに笑顔で接し，自分自身が活動を楽しんでほしいといった思いが窺えた．第4 Subgraphには「ユア・フレンド」「出来る」

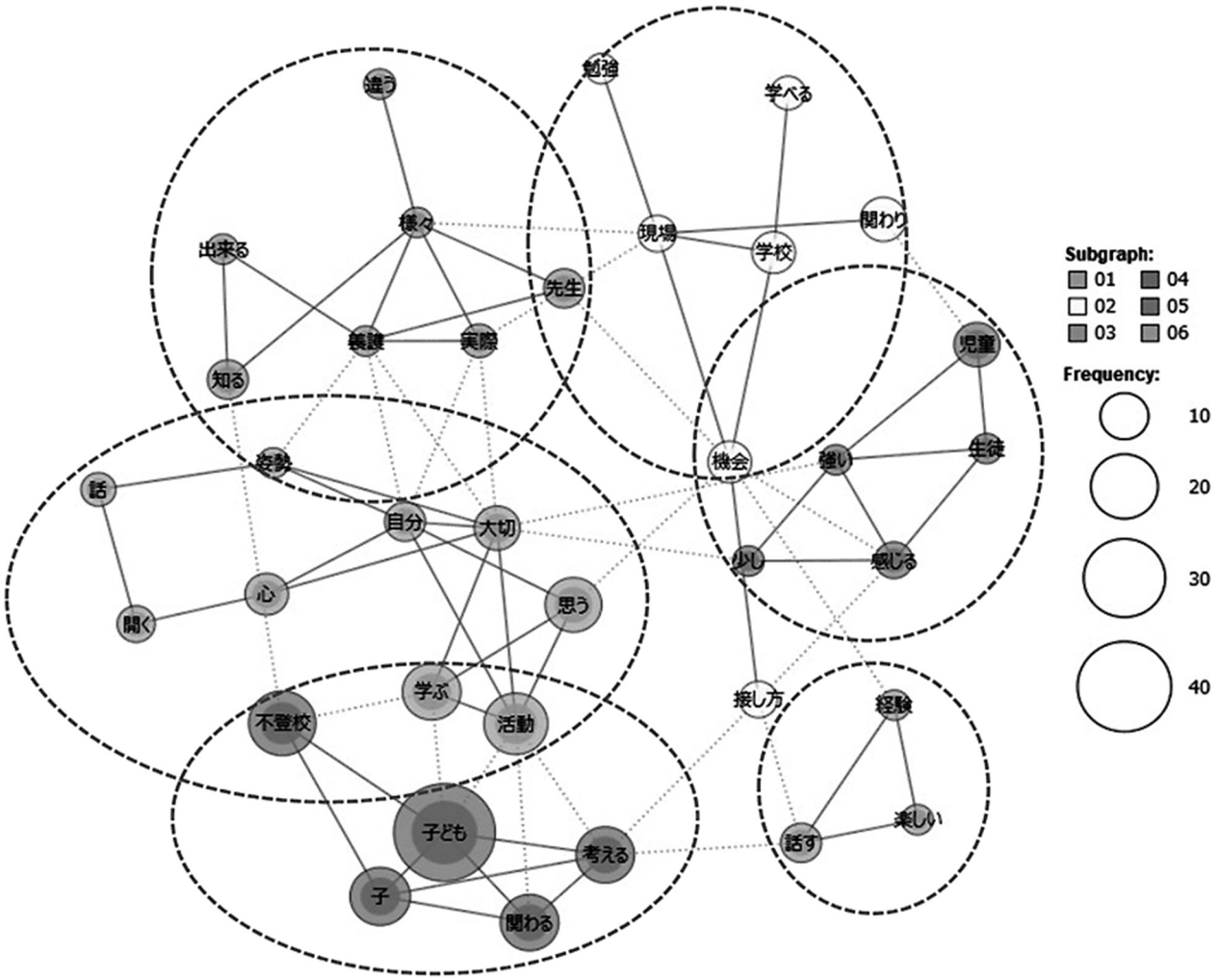

図3　【学びになったこと】についての共起ネットワーク

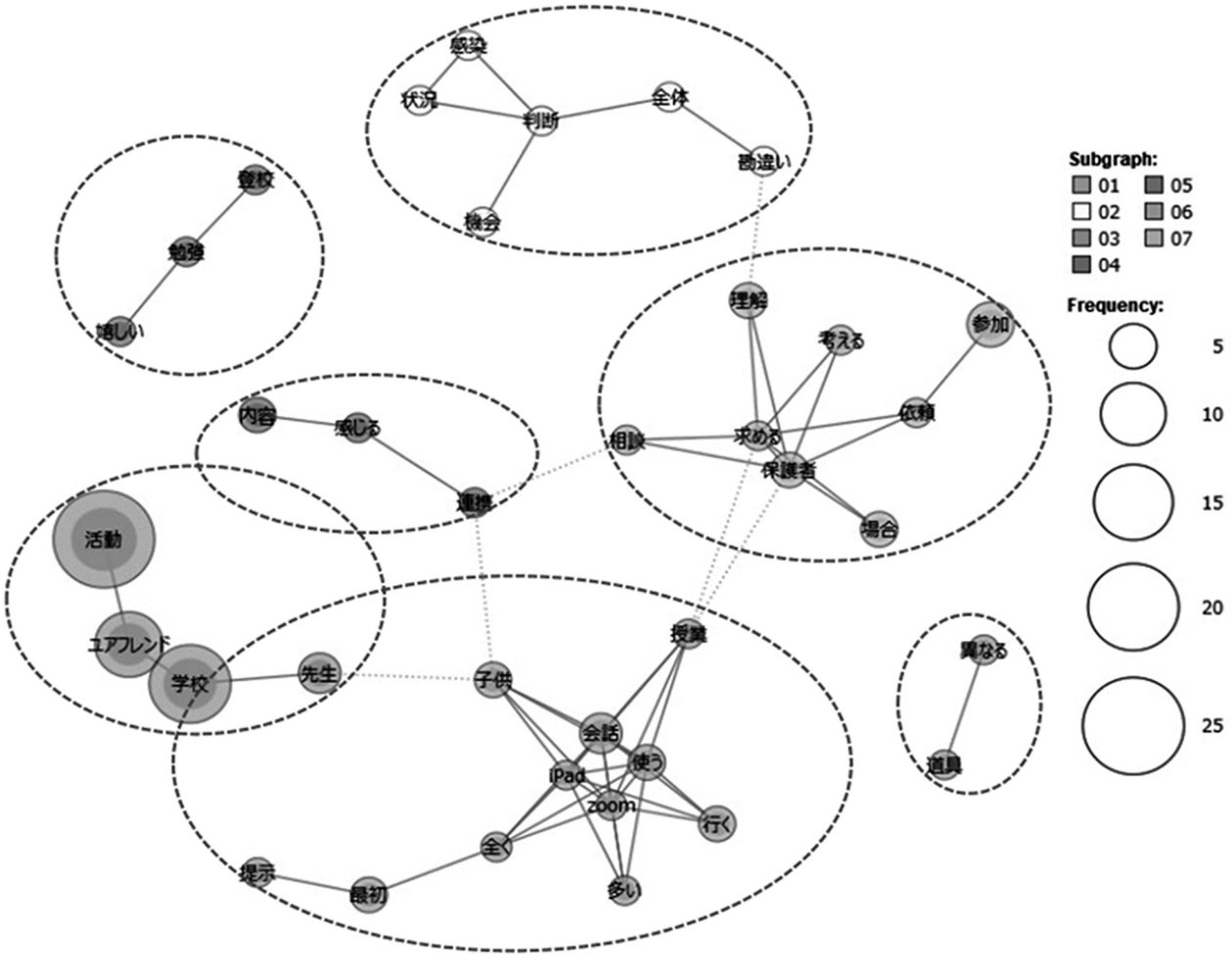

図４　【活動の課題】についての共起ネットワーク

「機会」「今」「明るい」「気持ち」「教師」「大学生」といった単語が抽出され，教師になるにあたって，大学生のうちにユア・フレンド活動に関わることで自分自身が明るい気持ちになれることについて述べられていることが窺えた．第５Subgraph には「経験」「大変」「良い」「不安」といった単語が抽出され，最初は不安かもしれないが大きな経験になることを伝える思いが窺えた．第６Subgraph には「自分」「子ども」「思う」「活動」「参加」といった単語が抽出され，子どものためでもあり自分のためでもあるこの活動にぜひ参加してほしいという思いであることが窺えた．第７Subgraph には「大事」「学校」「現場」「先生」「担当」「上手い」「感じる」といった単語が抽出され，学校現場で自分の考えを先生方に伝えることの重要性が示唆された（図５参照）．

４．考　察

アンケート調査結果より，ユア・フレンド学生は活動が楽しいほど学びになったと感じ，参加してよかったと回答する傾向が高かったことが示唆された．そして，活動に対して悩んでいる学生は大変さについても感じていることが窺えた．一方で，学年が上がるほど活動に対して悩むことが多くなっていることも示唆された．これについては，ひとつには様々な状態にある児童生徒とどのように関わればよいのかについて，必ずしも自分が望ましいと思う関わりを行うことができないと感じることに対する悩みであるかもしれない．もしくは，活動を通して子どもとの信頼関係が深まり，ないし学生自身にとって活動の目的が明確化されていくなか，現場の学校や保護者の思いとの間でジレンマに陥ることが増えている可能性が考えられる．杉原（2016）が指摘したように，こうしたジレンマを学生が抱えずにいられるよう，大学と教育委員会及び学校現場との間で連携を深めることが重要であると考えられる．なお，普段の実践の中で学生に対しては大学や教育委員会へ遠慮なく相談することを繰り返し伝えてはいるが，学生からはなかなか言い出しづらい状況があるのではないかと考えられる．できるだけ学生自身が話し

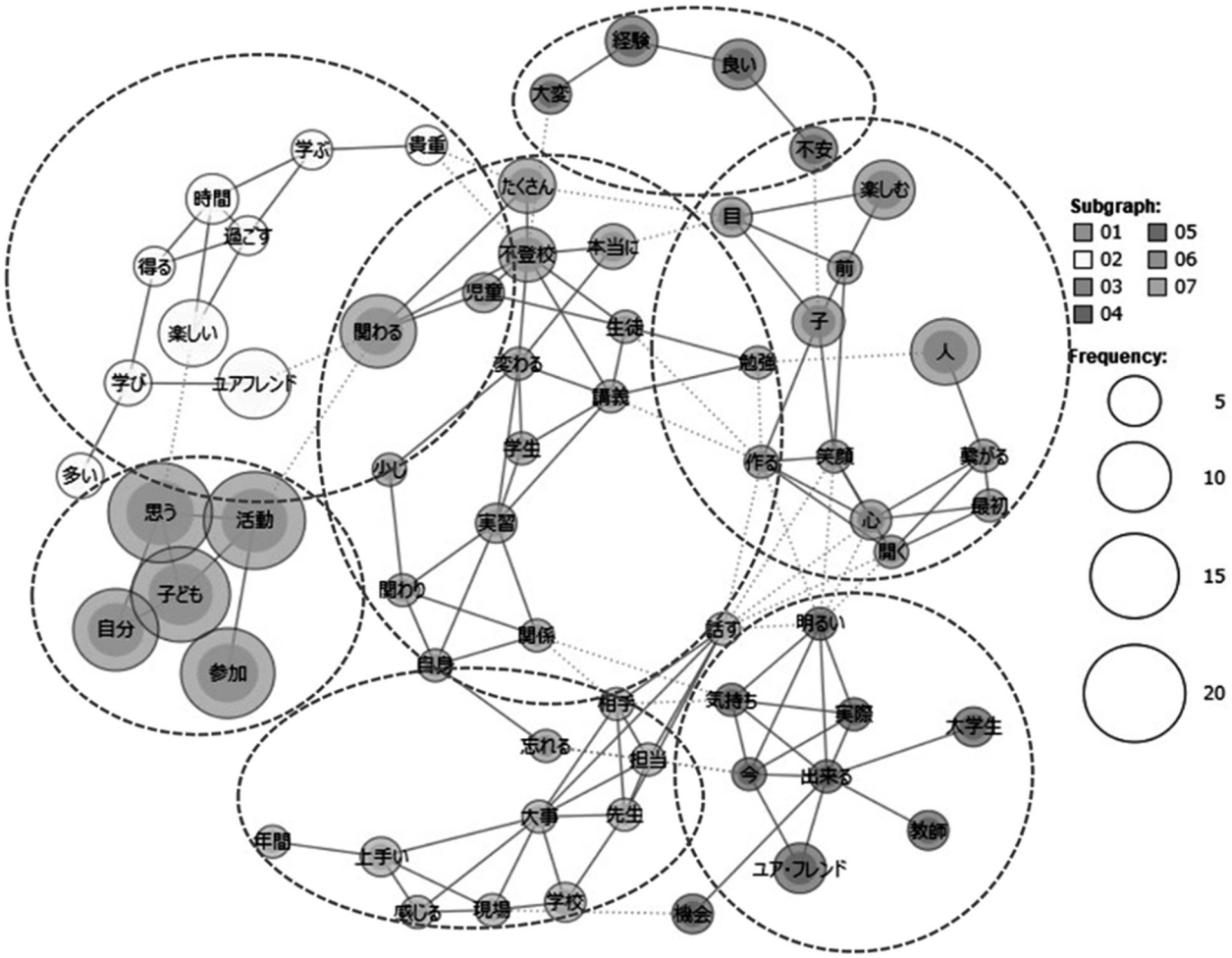

図５　【今後参加する学生に伝えたいこと】についての共起ネットワーク

やすい・相談しやすい環境を整備していくことが求められている．

また，【学びになったこと】への自由記述の分析から，学生たちは不登校の子どもたちと関わることで考える機会を多く得ており，また教育実習以外で学校現場に関わる機会であると実感していることが窺えた．活動を通して「不登校」のイメージが変わったという体験を得ている学生も少なくないのではないだろうか．また，活動自体が学生自身にとって楽しい体験になっていることも窺えた．学生たちは，カウンセリングにおける「受容」と「共感」のマインドをもって子どもたちと関わることが十分にできているのではないかと考えられる．また，コロナ禍で様々な活動が制約される中，学生たちにとっては自分自身の存在意義を確かめられる場にもなっているのではないだろうか．辻野ら（2004）が示したように，現在においてもユア・フレンド活動は教職を目指す学生にとって重要な学びの機会になっていると言える．

一方，【活動の課題】では，特にコロナ禍にある今，家庭派遣が実施できていないため，学校に出てこられない児童生徒とのつながりをどう工夫すべきかについて，学生の側も積極的に問題意識を抱いていることが窺えた．そして学生にとっても不用意な感染は不利益を招いてしまう．そのため，学生が安心して活動に取り組めるよう，オンラインツールをより効果的に活用するなどして，難しい状況ではあるがより一層活動方法の工夫を模索する必要がある．また，学校・地域によっては活動の趣旨を必ずしも理解してもらえていないことが窺える内容があった．これは学校に準備してある道具の違いにも表れ，別室で過ごす児童生徒の過ごしやすさとも関連しているように思われる．不登校児童生徒数が増加の一途をたどる現在において，子どもたちにとって学校（もしくは義務教育）という場がどういう場であるべきかについて，大人たちは真剣に議論していく必要がある．

そして【これからの参加学生に伝えたいこと】では，子どものためであると同時に，自分のためになる活動としてその意義が強調されていることに注目

したい．これは，この事業が学生に対して義務的な参加を求めるものではなく，あくまでボランティアとして参加を募っている活動であるということが重要であろうと考えられる．特に教職を目指している学生にとっては，「仕事」として子どもたちと向き合うことになる前に，「子どもに寄り添う」ということが教師としての「仕事」に必ず役に立つであろうということを，体験的に理解できているのではないだろうか．このことは，「不登校を減らす」ことを目的としない活動であるからこそ成しえる学びであろうと思われるし，こうした学びは学生たちが教師という仕事を受け身ではなく主体的・積極的に捉えて現場に出て行ってくれることを期待できるものでもあるのではないだろうか．繰り返しになるが，不登校に陥る児童生徒が年々増加している現状に対し，大人たちは学校のあり方について再考し，子どもたちへ誠実に向き合う時期が訪れているのではないかと思われる．

なお，活動に参加するのは依然として女子学生が多く，男子学生の参加が課題である．これは事業継続にあたり例年課題として挙げられていることでもあり，男子学生へのより積極的な広報が必要である．さまざまな要因で起こる「不登校」について，決して軽視することなく，関係者全体で理解を深めて支援にあたることが望まれる．

引用文献

文部科学省（2021）令和２年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果.

但田勝義（2019）学生による無料学習支援活動の成果と課題～稚内市「教たま数学教室」，豊富町「チャレンジ教室」を通じて～．稚内北星学園大学紀要，(20)，7-21.

屋良皇稀・淡野将太（2019）児童の登校を巡る意識に関する研究．琉球大学教育学部紀要，(95)，57-63.

辻野智二・大迫靖雄・永山博・堀川治城・河上　強・三原悟・白石紗央里（2004）ユア・フレンド活動の現状と今後の課題―不登校児童生徒への新たな支援活動―．熊本大学教育学部紀要 人文科学，53，145-151.

藤中隆久（2004）ユア・フレンド事業に対する心理臨床学的考察．熊本大学教育実践研究，(21)，145-151.

杉原哲郎（2016）不登校児童生徒の子ども理解―ユア・フレンド事業の取り組みを通して―．熊本大学教育実践研究，(33)，173-180.

付　記

本研究は日本心理臨床学会第41回大会にて発表した内容を加筆修正したものです．日頃からユア・フレンド活動に従事してくれ，調査に協力して頂いた学生たち，及び熊本市教育委員会の皆様に記して感謝申し上げます．なお，本研究において開示すべき利益相反はありません．